郷土館発 鐵道のお話 Ⅳ

津具の文化資料展示センターにある『中◇鐵道伊那及足助線踏測平面略圖』の概要を前々回に紹介しました。（明治二十二年～二十七年に作られた地図と考えられる）

※地図の拡大版を
郷土館に展示します。
ご覧ください。

現在の中央線を伊那谷から阿南町～津具～名倉～稲武に抜けるルートにしようという計画図です。

地図の右上に『飯田（いいだ）』があります。そこから現在の道でたどると国道一五三号線で『駒場（こまんば）』まで行き、県道六四号線に入り『伍和（ごか）』を通り『親田（おやだ）』あたりで国道一五一号線に入ります。その後は、『陽皐（ひさわ）』～『富草（とみくさ）』～『西條（にしじょう）』～『帶川（おびかわ）』～『旦開（あさげ）＝新野』まで来ます。このルートは、現在の県道と国道周辺の線路を敷設するのに適したところを選んでいたのではないかと推測されます。ただ、帶川あたりは深い谷になるので、どのルートを通ったのだろうと考えてしまいます。

もっとわからないのが、『旦開＝新野』～『上津具』～『納庫』～『稲橋』とあっさり赤線が引いてありますが、『旦開』の標高が約七九四メートル、新野峠が一〇六〇メートル、折元峠九〇八メートル、津具支所のあたりで六八一メートル、名倉の大平あたりで六五九メートル、稲武支所で五〇五メートルという地形になっています。標高差と峠のある地形をどのように線路を敷く計画だったのでしょうか。豊根の地名が地図上には無いので、『旦開＝新野』から上津具に抜けるルートのようです。地図を見ながら考えると、いろいろな案が浮かんできます。

鉄道建設は、当時の人たちの熱い思いの結晶でした。この地図にある鉄道が通れば、伊那谷と名古屋を結ぶ鉄道という動脈ができ、沿線の地域の発展に必ず役立つと考えられていました。

次回は、地図に印刷されていた鉄道誘致文を紹介します。

（奥三河郷土館学芸員
渡邉 俊也